

初夏の暮景

小林守城

小さい豆まめぼたん釦の芽をさき 海草のような葉を広げ

生き還ってきたから それだけでいいのに

古い家の庭から移し替えた牡丹が 次々に

三輪も崩れ落ちそうに 咲き誇ってきたのだ

そんなに頑張らなくなつていいよ

帰ってきてくれただけで

大きく 真新しく

一年生のランドセルのように咲いた

もういいよ そつと耳打ちする

泥の燕が黒光りして宙を切り

今年も古い家の玄関に来て

賑やかになってきた

陽が落ちてからもしばらく

間延びしたこのゆとりの眺めが

薄暮への憂いとなるとき

蛙が一斉に啼き出し

ほととぎす

時 鳥が夜中になにやらの会話など

それぞれの生業にいそしみ

やがて沢の蛍が光の線描を始める

いま 赦ゆるししはすでに死の影だから

しばらくは そのまま赦さないで

あれこれと詩文を書きとめ

蛙めが笑っていそうな人生二毛作を

企てているわたしの今が はりついた自分が

とてもつまらなく思えてくるだ

いつまでたっても古い家の

ピアノは片付けられないだろう

夜中にこっそり帰ってきては

練習曲をピアノニッシモで弾く

子どもがまだどこかにいるのだから